

【書評・紹介】

瀬川 拓郎 著『コロポックルとはだれか—中世の千島列島とアイヌ伝説』

(東京、新典社、2012年5月、新書判、127頁、800円+税)

中村 和之

本書は、擦文文化期を中心に、アイヌ史を考古学の立場から検討し、斬新な著書をつぎつぎと発表している著者が、アイヌのコロポックル（小人）伝説を取りあげた意欲作である。著者によれば、本書の目的は、アイヌの小人伝説を読み直すことによって、この伝説が実在の集団をモデルにして成立した可能性を明らかにすることである。

本書の構成は、以下のようになっている。

はじめに—封印されたアイヌ伝説

I アイヌの小人伝説を読む

II 伝説の変容を考える

III 伝説の起源を考える

IV アイヌの千島進出

V 小人とはだれか

おわりに

まず著者は、コロポックル（小人）伝説の記録を年代順に検討する。

- A. ジョン・セーリス『日本渡航記』（1613年）
- B. 松坂七郎兵衛他『勢州船北海漂着記』（1662年）
- C. 松山観山『蝦夷談筆記（上）』（1710年）
- D. 菅江真澄『蝦夷喧辞弁』（1789年）
- E. 近藤重蔵『辺要分界図考（巻4）』（1804年）
- F. 志鎌万輔『東海参譚』（1806年）
- G. 秦憶丸『蝦夷島奇観』（1807年）
- H. 最上徳内『渡島筆記』（1808年）

筆者は、この伝説が中世までさかのぼるものであることを指摘し、ついで上記の諸記録にある小人の名称を三つの種類に分ける。一つめは竪穴住居に住む人（神）を意味する「竪穴系名称」、二つめはフキの葉の下の人（神）を意味する「フキの葉系名称」、三つ目は千島の人を意味する「千島系名称」である。これらのうち、「竪穴系名称」は主に北海道の東部で伝えられていた地域的な名称であり、三種類の名称のなかで最も古く成立したとする。

つぎに著者は、「アイヌが小人の手を引き入れた」「小人が窓から食料を差しだす（あるいは食料を乞う）」などの内容が、19世紀以降の記録にしか見えないことに注目し、小人伝説は19世紀に変容が起きたとする。この変化が起きた原因として、著者は、カムイ・ユウカラのオキクルミ伝説と小人伝説との融合が生じたとし、さらにお伽草子の「御曹子島渡り」などの中世の日本説話がアイヌ社会に伝播していた可能性も指摘する。

以上の検討のうえに、著者は上記の諸記録のなかで最も原型に近いと思われる『勢州船北海漂着記』（1662年）を、北海道の東部の伝聞をもとに成立したとし、さらにつぎの内容を

表紙画像

抽出する。

- ・小人は本島から 100 里も離れた「小人島」に住んでいる。
- ・その島にはワシが多くいる。
- ・小人は船で本島にやってくる。
- ・その目的は土鍋製作用の土（粘土）の採取にある。
- ・アイヌが脅かすと小人は身を隠す。

著者は、ワシ（オオワシ）の分布域から小人島を北千島かカムチャツカ半島とする。次に著者は、小人の土鍋製作に注目する。北千島では 19 世紀末まで土鍋の製法が伝えられていたが、北海道では、最も遅くまで土鍋が作られた東部でも 15～16 世紀には土鍋の製作は絶えた。このことから著者は、すでに土鍋を作らなくなっていた北海道のアイヌが、北千島アイヌの土鍋製作を奇異に感じたことが、小人の土鍋製作の伝説に反映しているのではないかと考える。したがって小人伝説は、15～16 世紀から『勢州船北海漂着記』が成立した 17 世紀後葉までの間に成立したとする。また北千島では、竪穴住居が近世まで使用されていた。さらに、高岡直吉「北千島調査報文」（1900 年）や鳥居龍蔵「北千島に存在する石器時代遺物は抑も何種族の残せしもの歟」（1901 年）などによれば、北千島アイヌは小人伝説を知らなかった。北千島アイヌは、竪穴住居や土器・石器を自分たちの先祖が残したものと考えているなど、北海道アイヌや南千島アイヌとは異なった認識を持っていた。以上のことから著者は、小人のモデルは千島アイヌであったとする。

先にあげたように、小人はアイヌが脅かすと身を隠すなど、アイヌとの直接的な接触を避けていた。その一方で、アイヌの側には小人を敵視する認識は見あたらない。著者はその理由として、新井白石『蝦夷志』（1720 年）にもみえる千島アイヌと北海道アイヌとの「沈黙交易」をあげる。『勢州船北海漂着記』には、千島アイヌが北海道アイヌや和人との直接的な接触を避けていたことが記されている。ところが 1712 年にエトロフ島に漂着した大隅国の船の記録では、エトロフ島のアイヌたちは船員たちを村へ伴っている。このことから著者は、和人やロシア人との接触が拡大するなかで、18 世紀の千島では「異人」や交易に対する考えに大きな変化が生じていた可能性を指摘する。そして 17 世紀までの「中世的千島」におけるアイヌが沈黙交易に依存し、他者との交流においてきわめて閉鎖的な性格を持つ人びとだったとして、交易と非交流という矛盾が「中世的千島」本質であったとする。

ところで、北千島の特産物であるオオワシやラッコは、伝説のなかでは小人がもたらす品物ではない。著者はその理由として、小人伝説が物語性と神秘性を増すなかで、小人と北千島を具体的に結びつける話が排除されていき、アイヌ世界の物語として成長を遂げた結論づけている。

本書は、小冊子ではあるが示唆に富む 1 冊であり、ひとつの伝説の成立と変容の過程を、考古学と文献史学の成果から検討している点が斬新である。随所に鋭い分析がみられ、評者はかつて、阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男—伝説とその世界』（平凡社、1974 年。後に『阿部謹也著作集』第 1 巻、筑摩書房、1999 年、に所収）を初めて読んだ時のような驚きを感じた。

その一方、19 世紀に起きたという小人伝説の変容の理由や、「フキの葉系名称」が拡大・定着していった過程など、著者が詳しくは触れなかった課題もある。いずれ、著者の見解をお示しいただければと思う。

（なかむら・かずゆき／函館工業高等専門学校）